

一【現代文】

【解答例】

問一 1 光景 2 上演 3 充足 4 翻弄 5 偉人

問二 単語の意味が定義されることで多義性が失われること。(二五字)

問三 金銭欲にとらわれた人間がその充足のためだけに生きていくこと。(三十字)

問四 科学的合理性に基づいた見通し可能な因果関係は、欲望に忠実に生きようとする人間の「合理的」な生き方とは相反するという事。(六十字)

問五

科学的合理性に基づいた見通し可能な人生ではなく、自らの欲望にとらわれてその充足のために生きることにより、偶然性を必然的なものとするところこそが人間が合理的に生きることだと考えている。(九十字)

【配点予想】(三十点)

問一 1点×5 解答通り

問二 3点 ニュアンスが出ていれば可。

※ 末尾の句点を脱した場合、1点減(以下同じ)。

問三 6点 ポイント以下の通り

a 前半が過不足なく説明されているか 3点

b 後半が過不足なく説明されているか 3点

※ 末尾が「から」「ため」になっていない場合、1点減。

問四 6点 ポイント以下の通り

a 「先手必勝の将棋」の内容が過不足なく説明されているか 3点

b 「人間の合理性」の内容が過不足なく説明されているか 3点

問五 10点 ポイント以下の通り

a 通常の「科学的合理性」について過不足なく説明されているか 3点

b 欲望に忠実に生きる生き方について過不足なく説明されているか 4点

c bが偶然性に意味を与えることが過不足なく説明されているか 3点

【解説(総合)】

二宮正之「小林秀雄のこと」からの出題。小林秀雄の用いる「合理性」という言葉の両義性について述べる。本文の長さや設問数はほぼ例年通りで、部分的な文脈と全体の趣旨の問いをバランスよく組み合わせさせた良問。

【解説(設問ごと)】

問一 漢字問題。標準的なものである。

問二 傍線部「標本になった蝶」がどのようなことのとえかを説明する問題。直後の文脈が言い換えである。

問三 傍線部「欲の皮のつっぱった人間が金儲けを己に誓う」とはどういうことかを説明する問題。この文脈では「人間」が直後の「老婆」に言い換えられている。

問四 傍線部「先手必勝の将棋には何の意味もない」というたとえによって筆者がどのようなことを言おうとしたのかをを問う問題。段落冒頭の「科学的合理性」の部分を使えば問三での人間的な合理性との対比になる。

問五 傍線部以降の文脈の「(小林秀雄における)合理的に生きること」を、筆写化はどのようなことととらえているかを本文全体の内容を踏まえて説明する問題。指定に沿って、ここまでの内容をまとめる。

## 二【現代文】

### 【解答例】

問一 1 ためらうようす 2 きっかけ 3 いたわり

問二 母子家庭である自分たちが同情されることで、自分の生き方が嫌になること。(三五字)

問三 施す側が施される側に屈辱感を与えまいと配慮することが、かえって相手の屈辱感を増してしまうことへの葛藤があったから。(六十字)

問四 恵に対して抱く反感の内容を意識することで、珊瑚が周囲の好意を受け入れられると考えたから。(四四字)

問五 くららの、周囲の同情に対する葛藤を捨てて、好意を受け入れて生きて欲しいという思いに感謝しつつも、やはりそうした生き方には抵抗があるという気持ち。(七十二字)

### 【配点予想】(三十点)

問一 1点×3 解答通り

問二 3点 ニュアンスが出ていれば可。

問三 8点 ポイント以下の通り

a 施す側の相手への配慮について過不足なく説明しているか 3点

b aによる施される側の心情を過不足なく説明しているか 3点

c a, bによる葛藤があることに触れているか 2点

問四 6点 ポイント以下の通り

a 「意識」の内容を過不足なく説明しているか 3点

b くららの珊瑚への思いを過不足なく説明しているか 3点

問五 10点 ポイント以下の通り

a 「葛藤」の内容を過不足なく説明しているか 3点

b くららの助言への思いを過不足なく説明しているか 3点

c 傍線部そのものにおける心情を過不足なく説明しているか 4点

### 【解説(総合)】

梨木香歩「雪と珊瑚と」からの出題。娘と二人で生きる珊瑚と友人のくららとの対話を通して、珊瑚が周囲の行為に対して抱く葛藤した心情を述べる。本文の長さや設問数はほぼ例年通りで、設問も標準的で、とりわけ最後の「全体をふまえて」の問いは頻出の形。

### 【解説(設問ごと)】

問一 語彙問題。標準的なものである。

問二 傍線部「アレルギー反応」とはどういうことかを問う問題。「アレルギー反応」は外部から入ってきたものに対する拒否反応なのだから、直前の珊瑚の科白をまとめればよいとわかる。

問三 「くららはため息をついた」理由なので至近の事実関係を説明すれば良い。

問四 傍線部「でも、彼女に反感を抱くことを、そういうふうに意識できれば、しめたもんですよ」について、くららはなぜ「しめたもんですよ」と伝えたのかを問う問題。ここまでの流れから珊瑚の葛藤を軽くしようとする意図であることは明らか。

問五 傍線部「やっぱり、葛藤なしにはできない、と思う」に珊瑚のどのような気持ちが表れているかを本文全体の内容をふまえて説明する問題。「全体」の指定があるので、傍線部近辺だけでなくくららとのやり取りの内容も押さえて説明する。東北大の典型問題。

## 三 古文

### 【解答】

問(一) (1) たいそうなものだ

(2) むなしいこと

問(二) その方こそ将門の君でいらっしゃる。見間違いなさったのでしょうか

問(三) 七体の将門のうち本体だけ影があり、黄金の体の中でこめかみだけが生身だということ。(四十字)

問四 小宰相の言葉通りに影のある将門のこめかみが動き、射殺す絶好の機会と思ったから。  
(三十九字)

問五 将門が都に攻め入るといふ噂を聞いて恐れていたが、首が届いたことで将門は討伐されたと分かったから。(四十八字)

【配点予想】(二十点)

問(一) 1点×2 計2点

問(二) 3点

- ・「にておはしませ」の訳は「でいらっしゃる」「であられる」など。(1点)  
※「に」を断定の助動詞として、「おはしませ」を尊敬語として訳す。
- ・「給ふ」の訳は「なさる」「お～になる」など。(1点)  
※「給ふ」を尊敬語として訳す。
- ・「にや」の訳は「ですか」「であろうか」「でしょうか」など。(1点)  
※「に」は断定の助動詞、「や」は疑問の係助詞として訳す。

問(三) 4点

- ・七体の将門のうち本体だけ影があるということを指摘。(2点)
- ・黄金の体の中でこめかみだけ生身であるということを指摘(2点)

問四 5点

- ・小宰相の言葉通りであることを指摘。(1点)
- ・影のある将門のこめかみが動いたことを指摘。(2点)
- ・射殺す絶好の機会であると思ったことを指摘。(2点)

問五 6点

- ・将門が攻め入るといふ噂を聞いて恐れていたことを指摘。(2点)
- ・将門の首が届けられたことを指摘。(2点)
- ・将門が討伐されたと分かったことを指摘。(2点)

【解説】

『俵藤太物語』(御伽草子。俵藤太秀郷の武勇譚。2巻。寛永ころ刊行の絵入り刊本以後、広く流布した)からの出題。本文全体の大意は分かりやすい。ただし、設問を解くには精密な直訳力と、字数におさめる文章力とが求められる。

問(一) (1)「ゆゆしけれ」は、「ゆゆし」の已然形。

「貞盛、秀郷」の「威勢のほど」がたいそうなものだということ。

(2)「いたづらごと」は、「むなしいこと」という意味。

「いたづらなり」を知っていれば意味を推測できるだろう。

問(二) 二つある「に」はどちらも断定の助動詞「なり」の連用形。

「おはしませ」は四段活用動詞「おはします」の已然形。上に係助詞「こそ」があり、係り結びとなっている。

「見まがふ」は「見間違ふ」。「給ふ」は尊敬の補助動詞「なさる」「お～になる」などと訳す。

問(三) 直前の小宰相の会話文から、七体いる将門のなかで、本体にだけは影ができないことと、黄金の身体の中でこめかみだけが生身であることが読み取れる。

問(四) 「このように思った」理由を聞かれているので、傍線部直前にかかれてある出来事をまとめる。また、その状況が将門を射殺す絶好の機会であったことも説明したい。

問(五) 最終段落の内容をまとめる。「御物思ひ」（心配・恐れ）の内容と、将門の首が届けられ、将門が討たれたと分かったことを説明する。

### 【全訳】

さて、平親王将門は、常にこの女房のようすを御覧になって、気に入りなされたので、時々この女房の御局へ通いなさるが、ちょうど親王がこの局にいらっしゃった時、秀郷が行き合ひ申し上げた。不思議に思って、物の隙間から覗き見ると、同じ男の姿の上臈が束帯を着て、七人同じように座りなさっている。これは不思議なことよと思って、その夜は帰った。次の日の夜また御局へ参って、いろいろ愛情深いことを言い交したあと、藤太が「さて昨夜、この御局で人がいる物音がしたので、誰であろうかと近づいて隙間から見てみると、とても高貴な上臈がいらっしゃっていましたがあれは誰であろうか」と質問されたところ、小宰相は「それは将門の君でいらっしゃる。見間違いなされたのですか」とおっしゃるので、藤太が重ねて申し上げるには、「殿であるならば、ただお一人がいらっしゃるはずだ。同じ容貌・服装の上臈が七人お会いなさっていたのが不思議なのだ」と申し上げると、小宰相は「さてはまだご存じないのですか。殿はこの世の常識を超え、御かたちは一人であるけれども、お姿は六体いらっしゃるので、人の目には七人に見えなさるのだ。」藤太は不思議なことと思い、「さて御本体の見分け方はございますか」と問われて、女房は「決して人には言わないことであるけれども、あなたなので申し上げますのです。いいかげんにお考えになり、他人に漏らしなされるなよ。あの将門は御すがたが七人であって、御ふるまいに異なるところがないとは

いっても、本体には、日に向かったり、灯火に向かったりするとき、影ができなされる。六体には影がない。そしてまたお体はすべて黄金であるとはいっても、お耳のそばにあるこめかみというところは生身の肉体である」と」と語りなされるので、藤太はしっかり聞いて、「やったぞ、重要なことを聞いたなあ。これこそ本当にわが生国の新羅大明神の御告げだろう」と、とても有難くて、そちらの方角へ向かって感謝の祈りを送った。

こうなれば今度、将門をただ一矢で射伏せるようなことは、思いのままだと考え、その後は夜な夜な、その御局へ参上する際には、ひそかに弓と矢をわきばさみ、こっそりうかがっていた。案の定、また将門がその御局へ入りなさせて、うちとけて世間話などをしなさせている。藤太は、物の隙間からじっくり見ると、言った通り六人には、灯火にうつる影がない。本体には影があると言うのに従って、目を澄まして見ると、ときどきそのこめかみというところが動いていた。藤太は、ああ幸運だなあと、弓と矢をつがい、ひゅうっと射た。元来秀郷は優れた兵士で弓の名人、養由の百歩の芸よりもすぐれている上に、距離も近い。どうして射損じるはずがあろうか。小耳の根元と思われるところを向こうへずんと射抜いたところ、さすがの勇猛な将門も、仰向けに倒れて死んでしまったので、残る六人のすがたも電光石火のごとく、光とともに消え失せてしまった。

さて将門が死んだので、貞盛、秀郷は喜びのあまり顔をほころばせ、打ち取った首、ならびに捕虜たちを召し連れ、騒ぎ立てて上京する威勢の程度ははなはだしい。道が遠いので、京の都へは事の真相は伝わらない。官軍はいくさに負け、将門はもうすぐ都へ攻め入るなどと噂が聞こえたので、天皇は大いに驚きなさせて、諸寺諸山に勅使を送り、調伏の法を繰り返し行えという内容の、宣下を下される。その中で八坂の浄蔵貴所は、「この度将門が攻めのぼるということは、全くもってでたらめであるだろう。もしそうでなかったら仏法の効験は、むなしいことであるだろう。ただしあの首が上京しているのでしょうか」と天皇へお答え申し上げられたが、果して四月二十五日、貞盛、秀郷の両人が、将門の首を持って上洛された。これによって、天皇もご心配が無くなり、家臣も喜び勇んで、全国の人々は安心することとなった。

#### 四【漢文】

##### 【解答例】

問一 1 世話をしにくい

2 理由を尋ねた

問二 これによりてこれをいわ(は)ば

問三 閩産の蘭の香りと飲用の茶の味が共に清らかなこと。(二四字)

問四 臭腐 穢 神奇 甘与芳

問五 あなたはかたくなで、昔聞いた蘭の育て方にこだわり過ぎだということ。

問六

初めは昔聞いた通りに銘茶を与えて世話をしたが枯れてしまい、客の意見にも納得しなかったが、蘭の性質が変化したのだと考えを変え、肥料を与えて咲かせた。(七三字)

**【配点予想】(二十点)**

問一 1点×2 解答通り

問二 1点 解答通り

問三 3点 ニュアンスが出ていれば可

問四 1点×2 解答通り

問五 4点 ポイント以下の通り

a 構文を正しくとらえているか 2点

b 「所聞」の内容を正しく補っているか 2点

※bのみでは不可

問六 8点 ポイント以下の通り

a 最初の認識について説明しているか 3点

b 客の意見に対する考えを説明しているか 2点

c 最後の認識について説明しているか 3点

**【解説(総合)】**

陶望齡「養蘭説」からの出題。蘭の育て方をめぐる随筆。本文は例年に比べてかなり長い  
が内容は比較的平易。設問数は例年より一問多い六問だが、全体としてみればオーソドック  
スな良問。

**【解説(設問ごと)】**

問一 二字句の意味。1はやや難しいか。

問二 傍線部の書き下し。「ば」の前の活用(未然形)に注意。

問三 傍線部の筆者の考え。前後の文脈で考える。

問四 傍線部の「臭腐」「神奇」の説明。やはり前後の文脈。

問五 傍線部で「客」が「子」に言おうとしたことの説明。この場合「固而溺」という形な  
ので「固」は「溺」と並列で述語。

問六 蘭の栽培法についての筆者の認識を本文全体を踏まえて、筆者の行動の推移がわかる  
ように説明する問題。問三、問四と末尾の要素をバランスよくまとめる。